

NEWSLETTER

James Joyce Society of Japan, April 2019



Topics

1. 第31回研究大会の研究発表要旨
2. シンポジウム要旨
3. 第31回研究大会日程と会場
4. マッコート氏講演報告
5. 京都国際学会報告
6. 会費のお振込について
7. その他

事務局連絡先

〒448-8542

日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
愛知教育大学 外国語教育講座
道木一弘研究室内

✉ joyceanjapan@gmail.com

🔗 協会ホームページURL:

<https://www.joyce-society-japan.com>



ノース・アールストリートからオコネルストリート中央郵便局の方向を望む
(山田幸代/撮影)

第31回研究大会のご案内

2019年6月8日（土）、第31回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が京都で開催されます。会場は同志社大学今出川校室町キャンパス寒梅館です。尚、懇親会場に早めに参加人数を連絡する必要があるため、お手数ですが、同封した出欠確認ハガキを5月20日までに投函して下さいますようお願い致します。

日程：2019年6月8日（土）

会場：同志社大学 今出川校 室町キャンパス 寒梅館 B1F

懇親会場：寒梅館 7F フレンチ・レストランwill

1. 第31回研究大会 研究発表およびシンポジウム要旨

研究発表 “Grace”における“magic lantern”再考

岩下 いくみ

マジック・ランタン（幻灯機）は17世紀に西洋で発明され各国で流行後、スライドには絵や19世紀以降写真も用いられ、映画の前身のような役割を果たした。本発表の目的は*Dubliners*所収“Grace”の中で言及されるマジック・ランタン再考を通して作品を捉え直すことである。“Grace”の主人公である茶商人Tom Kernanは仲間の説得を受けて静修参加に同意した後、“I bar the magic lantern business”と発言する。この発言の中の“magic lantern”についてのいくつかの解釈に基づき、その歴史、カトリックとプロテスタントの関係、当時のアイルランドの状況を通して、多層的解釈を喚起する“magic lantern”について検討する。“Grace”の中ではマジック・ランタンに連なる視覚文化として、教皇レオ十三世が写真の発明に関する詩を書いていたことも言及されている。マジック・ランタンや写真という近代科学技術と教皇の接点を通して、近代化と教皇、科学技術と宗教の関わりについてあわせて考察する。

マジック・ランタンの歴史を再考する上で、その発明者とされるのがドイツのイエズス会士学者Athanasius Kircher (1602-1680)であるというその起源、マジック・ランタンが娯楽と同様に宗教や教育に活用されてきた歴史に注目し、カトリシズムと科学技術の発展の関わりに注目し、マジック・ランタンが“Grace”に登場する意義について論じる。

光はマジック・ランタンという映像機器に不可欠な要素であり、また、カトリシズムにおいては神や天国の代名詞である。“Grace”の構成の下敷きとされる*The Divine Comedy*では、光は主人公Danteが向かう信仰の象徴でもあった。“Grace”のKernanは友人らの導きにより静修に至るが、その場面はマジック・ランタン上映の場面とも似通っており、教会には聖体ランプ（光）が灯されている。こうした光と信仰にまつわる*The Divine Comedy*と“Grace”の関連から、“Grace”における古典テーマの反復について考えたい。さらに、カトリックの儀式である静修に参加することで共同体に帰属しようとするKernanと仲間たちを通して、希望の象徴である光と互いの助力に「恩寵」を見出そうとする共同体について分析する。以上の“Grace”におけるマジック・ランタンの再考を通して、マジック・ランタンに含意されているもの、*Dubliners*を含むジョイス作品全体につながるテーマを見出したい。

2. シンポジウム 要旨

シンポジウム I 第16挿話再読

パネリスト 須川 いくみ（司会）、中尾 真理、田中 祐子、田村 章

京都の『ユリシーズ』読書会を始めて30年で、この16挿話を読んだのは3回目であります。また私自身がシンポジウムで16挿話について話をさせてもらった時、丁度3人目の子供を妊娠していた時で、その息子が成人しているので、本当に長い時間が経過したと実感せざるを得ません。このような長いサイクルで読ん

でいくと前の事はすっかり忘れていたり、テキストからあの時も分からなかったけれどまだ分からないという事を再認識したりします。これこそ馬齢を重ねたということなのでしょうが、でもたまに問題を解決したりすると大きな喜びになります。また昔では考えられないことでしたが、この16挿話のような挿話が面白いと思えるようになってきました、今回はみんなで16挿話における語らいから、物語の語りと騙り、フィクション性についてまでお話できたらと思っています。

「若き日はこれにて終わりぬ」—ブルームとスティーヴンの音楽談義—

中尾 真理

16挿話でブルームは初めてスティーヴンと二人だけで言葉を交わす状態に漕ぎ着けるが、スティーヴンは一向に会話に乗ってこない。二人の気質が、詩人とブルジョアでまったく異なるのが原因だが、今一つの理由は、ブルームの話す内容が、父親の説教のようで、スティーヴンが聞く耳を持たないからだ。視線が合ってもスティーヴンは「ぼくは除外してください」と拒絶の言葉を投げかける。ブルームは驚き、うろたえる。それでも挿話の最後では、二人は腕を組んでエクレス街のブルームの家に向かって歩いていく。二人の話題がかみ合うようになったのは、ブルームが妻モリーの話から音楽に話を移したからである。スティーヴンは好きな17世紀のリュート奏者の話をし、「若き日は終わりぬ」というドイツ歌曲を歌い出す。その美声に聞きほれながら、ブルームはスティーヴンを自宅に連れ帰ることに成功したのだった。時刻は午前二時前、周囲はすでに眠りの世界に入っており、これ以後、『ユリシーズ』は視覚のきかない聴覚と闇の世界に入っていく。

ブルームとスティーヴンのわずかな接点となった音楽談義を中心に、マリガンとの交友を断つようにというブルームの助言、清掃馬車の馬にも注目しつつ、すれ違う父と子の交流を考える。

第16挿話における旅行譚の騙りについて

田中 祐子

16挿話は、オデュッセウスが老人に姿を偽り、豚飼イエウマイオスに作り話をする神話的対応を有することからも、アイデンティティーの不明確さと、「作り話」が重要な鍵となる挿話である。この挿話でブルームはスティーヴンを馭者溜まりに連れて行く。ここでブルームは、世界の方々へ行き様々な経験をしたことを得意げに語る、自称クイーンズタウン港、キャリガローの船員W. B. マーフィーの素性について疑いを持つ。ブルームは、この年老いた船乗りの話が作り話ではないかと疑いを持ち、その信憑性をますます疑うようになっていく。

こうした、旅行譚の語り手への疑いは、『ガリヴァー旅行記』——小人国リリパット、大人国ブロードインナグ、浮遊島ラピュタとその属領バルニバービ、不死の人の住むラグナグ、魔術師の住むグラブダブドリップ、馬の国といった奇想天外な国々を旅した記録である——においても、ついて回った問題である。歴史的な事実を騙る虚構について考えるなら、ダニエル・デフォーを参照する方が適切かもしれないが、本発表では、16挿話とスウィフトの作品との関連性について、その可能性を考えてみたい。

第16挿話における事実とフィクションの不可分性

田村 章

第15挿話の舞台となる娼館をあとにして夜の街をうろつくスティーヴンとブルームに、最初に声をかけるのがジョン・コーリーという男である。語り手は、この男の血筋について詳しい説明を付け、彼が名門の血を引いていることについて、「噂」(rumour, tale)という語を出して説明する。「根も葉もない噂」という言い回しがあるいっぽうで、「火のないところに煙は立たぬ」と言うこともある。噂とは、事実なのか虚偽なのか不明のまま世間に流布している話のことなのである。コーリーは、自分が失業中で今夜泊まる場所がないことをスティーヴンに訴えるが、これについても語り手は、完全な“fabrication”(U. 16.153)、すなわち「作り話」であるかもしれないこと、そして彼の愚痴話は、“on a par with the others was hardly deserving of much credence”(U. 16. 174-75)、すなわち「例によってほとんどが出鱈目である」ことがスティーヴンにはわかっていると説明している。にもかかわらず、スティーヴンは、コーリーにポケットの中にあつた銀貨を彼に貸し与えてしまう。このことに気がついたブルームは、探偵のように冷静にコーリーの人柄を推理する。そのあとブルームは舞台となる馭者溜りの店主がフェニックス公園暗殺事件に関わったとされる噂について、そこで彼らが出会うW.B.マーフィーという自称船乗りが語る航海譚について、「虚偽」ではないかと疑念を抱き、「事実」を解明しようとする。

第16挿話は「事実」と「虚偽」「作り話」「虚構」(「フィクション」という語でまとめることができる)の対比、あるいはこれらの不可分性を問題とする挿話として読むことができる。テキストを細かく読みながらこの問題について考えてみることにしたい。

シンポジウム II Joyce in Context: ムアの地層

パネリスト 金井 嘉彦(兼司会)、結城 英雄、戸田 勉

我々が話す言葉を、どれほど頑張って我々自身の言葉であると主張してみても、それがその実他者の言葉であることは、「私とは、一人の他者である」という詩人の言葉を引き合いに出さなくても、誰しものが自覚することであろう。その一方で、興味深いことに、いわゆる大作家とか天才と言われるような作家については、あたかもその作家が書く・口にする言葉は、その人自身のオリジナルな言葉であるかのような錯覚を抱き、研究者と言われる人たちの中にもその錯覚から抜け出せない人が多くいる。Joyce in Contextと題する本シンポジウムは、大作家・天才と言われるジョイスの言葉がいかに他者・時代に負うものかを確認する、当たり前と言えども、しかし決しておろそかにできない基本的な作業を(おそらくは何回かにわたって)行うものである。第一回目はジョイスのテキストの中にあるムアの地層を見ていく。

『未耕地』と『ダブリナーズ』再検証

戸田 勉

ジョイスのジョージ・ムアの作品に対する評価は厳しく、とりわけ『未耕地』(1903)に対しては辛辣だった。しかし、『未耕地』と『ダブリナーズ』(1914)を並べてみれば、両作品の間に明らかな類似点

が存在しており、ジョイスがムアからの影響を受けつつ短編集という概念を大きく進化させたことは多くの批評家の指摘するところである。ムアが『未耕地』について、「まだ生まれていないアイルランド人作家たちが私の短編集よりも本格的なものを書くためのモデルにしたいと思った」と語っていることからすれば、この目的は次の世代のジョイスを通して達成されたといえるだろう。しかし、この影響関係についての検証は1990年代以降ほとんど見られない。そこで本発表では、ジョイスが『未耕地』の中で大きな不満を覚えている「技巧」に注目し、それらを短編集の構成やナラトロジーなどの観点から見直し、『ダブリナーズ』との繋がりを再確認してゆくことから始めたい。

もうひとつの論点は、『未耕地』と『ダブリナーズ』がその後のアイルランド人作家に残した遺産についてである。特に、「離郷」や「帰郷」というテーマはムアからジョイスに引き継がれ、アイルランド文学の伝統を形作ってきたものであるが、これは21世紀の作品にも継承されている。この発表の後半では、コルム・トビーン『ブルックリン』(2009)とロディ・ドイル『死んだ共和国』(2011)を取り上げ、ムアやジョイスが提起した「離郷」や「帰郷」というテーマがどのように吸収され、21世紀にどのような意味を持って語られているのか考えたい。

ジョイスとムア——パリの文学的影響をめぐって

結城 英雄

ジェイムズ・ジョイス(1882-1941)とジョージ・ムア(1852-1933)は、敵対関係にあったと言われる。*Celibates* (1895)のイタリア語への翻訳の試みや、評論“*Ireland: Island of Saints and Sages*” (1907)などでの賛美もあるものの、ジョイスは“*The Day of the Rabblement*”(1901)や“*The Holy Office*” (1904)、手紙、*Ulysses*などではムアを揶揄している。ムアもまたジョイスを侮蔑するような発言をしている。その一方、両者の間には類似するところが多く、敵対関係は近親憎悪とも思われる。ムアの*The Untilled Field* (1903)と*Confessions of a Young Man* (1886)は、それぞれジョイスの*Dubliners* (1914)と*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916)と比較される。カトリックからの背教や検閲への挑戦、ならびに同時代の華やかな都市パリの文学的影響を受けていることでも変わらない。

本発表では戸田勉先生に続き、これまでの研究を基礎に*Confessions of a Young Man*と*A Portrait of the Artist as a Young Man*の関わりを探ることとする。そして*Parnell and His Island* (1887)や*Hail and Farewell* (1914)、および*Ulysses*の背景に揺曳する、パリの文学的影響を念頭に両者の相違を検討したい。なお、パリという都市を取りあげる都合もあり、両者の対立に付随する当時のアイルランドの文学事情も併せて考察しておきたい。

ムアとジョイスのバードガール

金井 嘉彦

『若き日の芸術家の肖像』第4章末で描かれるいわゆるバードガールは、作中人物スティーヴンが聖職者としてではなく芸術家として生きていくことを決意するきっかけとなる存在と言え、その意味においてバードガールが描かれるこの場面は、この小説の中で最も重要な場面の一つと言える。先行研究がすでに指摘をしているように、この海辺の少女の表象はシングの*The Aran Islands*に原型がある。それに比べれば

あまりよく知られていないこととして、ムアの*Hail and Farewell*にもこの海辺の少女の表象がある。こうしてジョイスのバードガールは、シング、ムアと続く海辺の少女表象に連なるものであることになるのだが、この三者を比較して分かることは、シングとムアの二人が、少なくとも重要な要素の一つとして性を前面に出しているのに対し、ジョイスの場合下着が見えそうなほどスカートがまくり上がった女性の姿からして、同様な性的な含意を持つもおかしくないのだが、その実その性的要素が不思議なほどに抜き取られている。本報告はジョイスがシングやムアの海辺の少女表象を引き継ぎながら、彼らとは違う要素を込めたことの意味を、ムアの他の作品やジョイスが読んでいた宗教的著作を参照しつつ探る。

3. 第31回研究大会日程・大会会場・懇親会場

大会の会場は同志社大学今出川校室町キャンパスの寒梅館地下1階となります。大会終了後には同館7階において懇親会が行われます。懇親会参加費は6,000円です。多くの方々のご参加をお待ちしております。尚、懇親会費は、当日受付でお支払いください。郵便での振り込みは受け付けできません。

第31回研究大会

日時：2019年6月8日（土）10:00-18:00

会場：同志社大学 今出川校 室町キャンパス 寒梅館 B1F

〒602-8580 京都府京都市上京区今出川通烏丸東入玄武町601番地

懇親会

日時：2019年6月8日（土）18:10-20:10

会場：寒梅館 7F フレンチ・レストラン will

TEL：075-251-0200

4. マッコート氏講演報告

イタリア・マチェラータ大学教授 ジョン・マッコート氏来日講演レポート

2018年10月7日 法政大学 / 10月10日 同志社大学



東京講演は10月初旬の日曜日、法政大学ボアソナード・タワー26階にて行われた。舞台裏のカーテンを開け放つと壁一面のガラス窓から都心を一望できる多目的ホールの近代的な設備から、マッコート氏は約100年前のダブリンへと聴衆を誘った。「『まともな人にはほとんど読まれていない』——1920～30年代にお

ける『ユリシーズ』の運命」という辛辣な講演タイトルは、当時の雑誌に掲載された書評からの引用である。この小説が本国ではいかに冷ややかな目で見られていたかが窺える。だが今となつてはそれも有名な話であるため、逆に出版直後のアイルランドで出された「肯定的な」書評が紹介された際には、正直なところ驚いた。またその的確な書評コメントの数々には、1922年という不安定な国内情勢の渦中で、この小説に一種の希望を見出そうとするアイルランドの知識人たちの姿が垣間見えた。なかでも後半で紹介された作家パードリック・コラムの詩と妻メアリーによる『ユリシーズ』論は、「アイルランド自由国」という暗い時代のイメージが部分的に払拭されるほど先見の明に満ちていた。

いっぽう翌週の水曜日には、同志社大学文学部棟1階の会議室にて「ジョイスがたどった『ユリシーズ』への多くの道すじ」と題した講演が行われた。そのタイトルが示すとおり、今度はこの小説の成り立ちについてである。「麻痺した」アイルランドを後にして“Exile”となったジョイスが、ヨーロッパ諸国の影響を受けながらイタリアにたどり着くまでの道のりが『ユリシーズ』の制作過程と並行してたどられた。なにより最後に紹介された、ジョイスが抱え続けた「アイルランドという小片は、トリエステの太陽のもとで熟していったのだ」というイタロ・ズヴェーヴォのコメントが印象的であった。小雨降る古都のしめった空気とは対照的に、晴れ渡ったトリエステの澄んだ空気がジョイスに故郷を見つめ直すきっかけを与えた瞬間が目に浮かぶような講演内容だった。（文責：山田幸代）

5. 京都国際学会報告

アイルランド文学国際学会（於・京都大学）の報告

去る3月21日（木・祝）、京都大学人間環境学研究科にて、京都大学人文社会系発信の未来形コンファレンスとしてアイルランド文学をテーマにした国際学会“*Irish Literature in the British Context*”が開催されました。ゲストにUCD英文学・演劇・映画学科講師のLuca Crispi博士をお招きして基調講演“*Development of Stephen Dedalus from A Portrait to Ulysses*”をご担当いただき、またアイルランド語と英語の両方で創作されている詩人Celia de Fréineさんをお招きして詩の朗読をしていただきました。研究発表およびシンポジウムは、主に京都大学関連の研究者によって行われましたが、一部遠方からの招待者も含め、日本ジェイムズ・ジョイス協会会員も複数名登壇されました。

事情があり、Crispi先生の招聘が決まったのが遅く、それに合わせて日程やプログラムを組みましたので、日本ジェイムズ・ジョイス協会の事務局には急遽ホームページで案内していただきましたが、会員の皆様には十分に周知する時間が取れなかったことを、開催メンバーの一員として深くお詫び申し上げます。それでも、遠方からのケースも含め、何人かの会員には会場まで足をお運びいただき、質疑応答などで場を盛り上げていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

Crispi先生は、言わずと知れたジョイス作品の生成研究の第一人者で、この分野の研究を長年主導してられました。その成果は*How Joyce Wrote Finnegans Wake* (2007) や*Joyce's Creative Process and the Construction of Characters in Ulysses* (2015) により夙に知られていますが、今回の講演ではその一端として、Stephen Dedalus関連の記述の生成的発展を解き明かしてくださいました。テキスト分析の深いところ

に、それも憶測や想像ではなくしっかりとしたエビデンスに基づいて触れることができ、刺激的なご講演でした。

学会にはご夫妻で来られ、前日と前々日には学会打ち合わせのついでに一部京都観光もなさいました。「お疲れでは？」というこちらの心配をよそに、むしろ「好奇心と活力で一杯だ」と仰って、何でも吸収しようというご姿勢には感銘を受けました。準備時間が少なかったため、他の場所での講演や談話などの機会を設けられなかったことは残念でしたが、先生は終始協力的で、これを機に日本の研究者たちとも繋がりができたのではないかと考えております。ご存じの方も多いと思いますが、Crispi先生はUCDでダブリン・ジェイムズ・ジョイス・サマースクールの世話もされています。日本から来たと言えばきっと喜んでくださいますので、ご関心のおありの方は一度ぜひ訪れてみてください。（横内一雄）

6. 会費のお振込について

会費は、協会の口座へのお振込みをお願いいたします。

振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担いただいております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、下記の振込先となりますのでご注意ください。

一般会員・・・5000円 学生会員・・・3500円

1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
口座番号（記号）10430
番号1854541

*振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。

2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会
銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900 店番号：048
預金種目：普通
店名：〇四八店（ゼロヨンハチ店）
口座番号：0185454

7. その他

国内外のジョイス関連の研究大会・学会等に参加された方がありましたら、ぜひ事務局までご一報ください。ニューズレターでの報告等をさせていただきます。

日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学 外国語教育講座 道木一弘研究室内

 joyceanjapan@gmail.com